

「環境リスク再考」 化学物質のリスクを制御する新体系

鈴木 規之 著

A5版, 136ページ, 定価3200円
(丸善, 2009年9月)

「リスク評価で環境の安全は守れない」。本書はこのような刺激的な文章で始まる。この言葉が、化学物質リスク評価の専門家として国内外で活躍されている、国立環境研究所、環境リスク研究センターの鈴木規之氏から発せられているというその事実は、さらに本書への興味をかきたてる。

化学物質の安全性に関心を持つならば一度は耳にするのが“化学物質のリスク評価”である。著者は「リスク評価が重要であることはじつは今もまったく正しい」としながらも、「リスク評価は環境と安全の問題のじつはほんの一部しか扱うことができないのである」と問題を提起する。本編ではその理由を、水道水の消毒副生成物、ダイオキシン、内分泌かく乱物質(環境ホルモン)という環境リスク評価の大きな契機となった三つの事象を具体例としてあげつつ、平易な文章で解説していく。

議論の進むなか、内分泌かく乱化学物質については「リスク評価の失敗」として、有意義な結果は得られなかったと紹介される。その理由として、「現在のリスク評価は、がんによって人が死に至る可能性にさらされたときに、それを絶対の有害性として、唯一の尺度として、リスクを計算することができるだけのものである」、「つまるところ人が死ぬ危険性しか評価できない方法論で、内分泌かく乱という人の死の可能性と必ずしもただちに対応しない複雑な問題に立ち向かうのは無理があった」と指摘する。加えて、「今われわれが直面している化学物質のさまざまな問題は、決して人の死の可能性への危惧だけを考えているわけではない。おそらくそのほとんどに現在のリスク評価がそのまま通用することはないだろう」と現在のリスク評価への警告を発している。本書を室内環境における化学物質暴露のリスク評価と重ねて考えたとき、その難しさを再確認するとともに、今後の取り組みの必要性を再認識させられた。

本書では、難解で敷居の高いイメージのあるリスクの概念が、具体例や比喩表現によって分かり易く解説されている。化学物質の安全性に興味はあるがリスク評価は専門外、というみなさまにぜひお勧めしたい一冊である。



(佐賀大学農学部生物環境科学科 講師 上野大介)